

土 淨

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（每月一冊）
 昭和二十一年四月二十八日通商省特許承審部註冊第三五二號
 昭和三十一年十一月二十五日印刷
 昭和三十一年十二月一日發行

第二十二卷

第十一號



十一・二月號

御歌

雪のうち

佛のみなを

稱ふれば

つもれる罪も

やがて

消えぬる

目次

巻頭言

.....(1)

共生のつとめを通し阿彌陀佛を觀る.....吉原自覺.....(2)

佛教美術より見たる阿彌陀佛.....小島章見.....(6)

童話鬼の念佛.....内山憲尚.....(12)

金光上人感得靈像をお守りして.....工藤昌瑞.....(16)

眞葛ヶ原問答―第二部.....萩行健堂.....(20)

佛教入門(その九).....佐藤密雄.....(24)

鑽仰會メモ..........(29)

三十一年度目次總目錄..........(30)

その他「書評」「新會員紹介」

卷 頭 言

最近、佛教放送協會が誕生した。本年春には、ビリー・グラハムというアメリカのキリスト教傳道者がやつて來た。彼の説教は少くて數千、多くは數萬の聽衆を前にして行われたといわれる。そして一度の説教で、數十人數百人の人が、新たにキリスト教信者になるのが常だとのことである。新興教團の本部へ行つてみると、數百數千の人々が一堂に集つて聽聞している。本堂の片隅で、一人の信徒と膝をまちえて話し合うという時代ではなくなつた。

現代フランスの思想家シーグフリードは、私共の住む現在の世界をいくつかの特長でまとめているが、その一つに「廣告の時代」という項目をあげて、宗教もまた廣告の時代にあることを主張している。新聞・雑誌・ラジオ・テレビが發達して來たために、マス・コミュニケーション（大衆宣傳）が盛んになつて來た。パリで發表された最新流行の服裝は、一週間もたたずに、ニュース・カメラや雑誌によつて日本に送られて來る。中共治下の佛教政策も旬日を待たず、私共の目の前に知らされて來る。こうして、凡ゆることが、すべて宣傳の波にのりさえすれば、世界の隅々にまで、一瞬のうちに行きわたつて行く。

かつて宗祖法然上人が、黒谷の庵で淨土門の説法を開筵されたおり、堂は聽法の大衆にみちあふれて、道行く人も足をとどめたとのことである。當時としては、大變なマス・コミュニケーションだつたに相異ない。爾來七百數星霜、大衆說法のお株は新興教團に奪われて、寺門は雀羅のあわれをとどめている。こうした世代にあつては、シーグフリードではないが、佛教も、ラジオに、テレビに、新聞に雑誌に進出すべきである。

本誌の發行部數は經濟的に許るされないために、僅々三千部である。が、考えてみれば、一寺の本堂にもし人を集めるとするならば、たとえどんなに努力しても、三百人もむづかしいのではないだろうか。してみれば、本誌の部數の徒らに少いのを嘆く必要はない。かりに半分の人しか讀まぬにしても、その成果は大きい。本堂に檀家を集めることを考える前に、まづ檀家個々の人の胸に與える何物かが必要である。その紙のつぶてとなり、マス・コミの絆となることに、本誌の現代的使命があると確信する。（竹中）

共生のつとめを通し阿彌陀佛を觀る

吉 原 自 覺

古聖は、これを知るものは、これを好むものにしかず、

これを好むものは、これを味ふものにしかず。と云はれた、

宗教は冷暖自知で驕直に神や佛に突入して、神を見、佛を
愛樂すればよい、理論の遊戲は蛇足に過ぎない、法然上人
が尼入道の輩に同じうして、知者の振舞をせずして一向に

念佛すべしとの御言葉通りでありませう。さはさり乍ら百
人百色で、はてなあの疑惑に對し、なるほどとの了解なし

には落ち付けぬ場合がある、時折阿彌陀如來とはどんな方

だらうかとの質疑に接する場合がある。阿彌陀とは、アミ

ダア婆、アミダ由、と申して、光明無量、壽命無量の御佛

なりと申しても、しつくりしない、況んや佛身論に這入る

と尙更五里霧中である、曾て姉崎先生が、現身佛と法身佛

を、著はされた、現身佛と、法身佛はうなづけるが、報身
佛となると薩張り解らなくなる、求道者の悩む問題であり
ます。そこで果して其の問題に解答を與へ得るかどうかは
讀者の判斷に任せ、これより數項に分ち書き續ける事に致
しませう。

先以て、共生のつとめ第四章の劈頭に、『大なるかな如
來。如々の實相は山海金石草木となり、無足多足二足とな
り、生々進化息まざるは如來の大力』

とあります。如々の實相の進化を示して居ります。斯様
な見解は、佛教の特異性であります。佛教前の印度の宗教
も大有、眞有の『梵』^{ブラスマン}を認め、舊約書には、エホバは在り
在るものとなし、實在の實在を考へて居る、佛陀の教へは

生き生きる教へであるが、他の多くは在り在るものと教へて居る、佛陀は、『すべて有るものは滅ぶるものであり、穢れである、空のみ眞なり滅せず』と仰せられた、釋尊獨創の緣起觀は、一切の萬有は相關發系の上に進化するものとせられた、佛陀の證悟如何に拘はらず、萬法緣起は大自然的の實相であり、又究極の眞理であります。

如來とは、如々の來現であつて、換言すれば、完全な進化其者といふことであります。近世の生物進化論や餘他の進化論は假定説に立脚して居りますが、茲にいふ如來は、進化其者なりとの信念に立つものであります。萬有を貫いて天地は生きる進化であつて、其の進化の力は、野にも山にも、虫魚にも現はれて居ります、更に無足多足と進化し二足の人間まで進化し來つたのであります。二足の人間にまで進化したりとしても、徒らに呼吸し飲食し筋肉活動し、勞苦安逸なるのみでは、まだ偽善的人生であります、人間が萬物の靈長と呼ばれる譯は、人間に迄進化し來る事によつて、他の生物の發揮出來ざる靈性のめざめがあるからであります、醒めるものは生きる、人間ならではなし能はざる活力が前に顯現するのであります。如斯生々進化息まざるは如來の大力であるので、先づ最初に、大なるかな如來と申すのであります。

次に佛光の大用。

『明來り、闇去り、愚癡破れて慧光輝き、白道昭々たるは大用。』

實相の進化が、今茲に人格の上に覺醒意志となつて現はれ來つたのは一段の進化であります。大なる如來力が佛光照益となり、無明の闇黒去つて智慧の明現はれ、生死流轉の鐵鎖を裁斷し、昭々たる白道の曙光を仰ぎ見るのは佛光の大用であります。

次に曰く、壽王の^{おほ}大生。

『死を^し甦^{よみがへ}し苦を^{くるしみ}度^{わた}し、惡趣閉ぢて善道通し、正命天々たるは壽王の^{おほ}大生。彼の佛の光明無量にして十方の國を照し障礙せらるゝなく、その壽量も亦た無邊なり。受化の衆生白道を履み、聖果を得るものまた算數の及ぶ所にあらず。故に無量と呼ばれ給ふ如來は^{おほ}大なるかな。』

覺醒意志は、選擇決定となり、選擇決定は本願意志となり、本願意志は本願成就へと進轉する、一人の發心者が強盛なる發願の動機を起す、其の根本動機には反對者もあれば、賛成者もある、どつちつかずの高見の見物もあるが、遂には夫等の反對も、中立も、完全に根本の動機と合體すれば、無力も有力となり、全體の緣が有力と化する、是れ則ち彌陀の成佛であります。前に完全なる生命相續となり所謂報身體となるのであります。こうなれば法性眞如海は化して彌陀知願海となり、又本願海となるのであります。

論註には、正道の大慈悲は出世の善根より生ずるとせられた、吾等人類の目標たる正道や、大慈悲は、自我の迷亡を洗除し去つた出世の善根より生れたものである。されば私共絶對如來にぬかづき、只管自己の罪惡の團塊たるを愧ぢ、全心身を擧げて如來に歸投するとき、そこに絶對の救済が成立するのである、全分他受用の如來は、爲して爲さざるなく、爲してなせりとせざるが故に、南無と打任せる處に無條件の救となるものであります。所謂死を甦し、苦を度し、惡趣閉ぢて善道通じ、正命天々たるは壽王の大生たる所以であります。従是已下は、阿彌陀佛の光明無量、壽命無量なることを示すものである。

無量壽經には阿彌陀佛の無量光を贊美して十二通りの名が擧げられて居ります。

『是の故に無量壽佛をば無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、徼王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號し奉る。其れ衆生有て斯の光に遇ふ者は三垢消滅して身意柔軟なり、歡喜踊躍して善心生ず。若し三塗勤苦の處に在て此の光明を見奉れば皆休息を得て復た苦惱なし。壽終の後皆解脫を蒙る』

無礙光なるが故に何もののよく障ふこともない、無邊光なるが故に、よく衆生の心想の中に入り、絶えず反省、

理解、發明となつて進んで行くのであります。是の光りを受けるのを遇斯光と云ひ見比光と申します、即ち智情意の上に現はれ、貧瞋痴三毒の汚れ名残りなく掃はれるのであります。

無量光は又無量壽であります、私共の眞に生きて居るのは唯呼吸や飲食して生存して居ることではない、みいのちに生くる嬉しさであります。淨ち教が眞の生命の宗教たる所以であります。

彼の佛の光明無量なるが故に受化の衆生のめざめるものの改善又窮みなきであります。初發心より臨終に至るまで正念相續して聖果に及ぶ。佛の光壽無量なるは衆生のためであります。衆生の白道推進なるは佛の御力の表現であります。生佛不離にして無量と呼ばれ玉ふ如來なるが故に、無量即ち阿彌陀と呼ばれ玉ふ如きは大きなと讃美するのであります。

是れを要約して表示すれば、

萬法……………法平等

進化……………如來現(體)

如來の大力

人格……………佛性開發(相)

佛光の大用

眞生……………照用光益(用)

共生(社會格)

報身完全聖格……生命相續……壽王の大王

如來は前に無量壽如來として全分他受用なる報身體（人格體）として、私に生き凡てに生き無限の自他即一に衆生を成就し玉ふのであります。前に始めて、聖善導の所謂「決定して深く信ず、彼の阿彌陀佛、四十八願を以て衆生を攝受し玉ふ。疑なく慮無く、彼の願力に乗じて定んで往生を得」との信念に到達したのであります。

尤後に大恩の如來。曰く

『一餐の食、一漿の飲、天生じ地育す、覆載生育の徳や大なり。日月照し、草木養ひ、蠶蜂益し、鶏牛助く、萬有群生の恵や厚し、有無相通じ、彼此互に扶け、同胞俱に愛し、人情相和す、人類共存の誼は深し、邇れば祖遠く下れば裔長し、曩祖空しく没せず後昆今に存す、祖孫の流れ長くして約て吾に在り、去來を攝して現在に定まり、善惡を通じて方寸に決す、生命の任は重くして收て今に存す、一切を抱擁して歩々進化せしむる如來の壽光は無量にして絶對なり。瞻仰の丹誠を披けば尊容儼然たり、大恩の如來偉なるかな。』

佛教の思想を味ふには、知恩報恩の意義を如實に領解せねばなりません、今は解明の餘地がないから結論として其の梗概を申述べます。世間の有量有作の恩に對し佛教は無

量無作の恩を説く。從而第一父母の恩は、時の力で、今の私は祖先より子孫の流れの中心にあつて祖孫を代表して立つものであります。眞人としてめざめ奉公することが父母の恩に酬ゆることであります。第二の國王の恩とは、社會國家を國王に代表せしめたので、共存の恩であります。第三の衆生恩は日月山川草木虫魚等萬有群生の恵み、人類共存の力であります。如斯縱に祖孫の流れ、横に萬有相關、相互扶助、人類共存と其のつながりを眺むる時、天地間一物として自分を育つる恩所でないものはありません。是の恩をして恩たらしむるが三寶の大恩であります。

大恩の集合して居る其の中心の一點が現在の自分である。自分は大恩の塊りであるとするのは正しく又尊い自覺であります。茲に報恩の大作が現はれて來るのであります。

大恩の如來。斯の如き恩力の一切を抱擁して歩々進化せしめ、恩をして眞に大恩たらしむる大生命力は、歸依の當體である阿彌陀佛であります。一切を抱擁する大進化力大生命力は實に無量にして絶對であります。眞の進歩眞の生命、是れを暫く人格と呼ぶ、所在是佛所、目を開くところ必ず佛を見奉るものであります、尊容儼然として所在拜まれる、大恩の如來偉なるかなであります。已上

佛教美術より觀たる阿彌陀佛

小 島 章 見

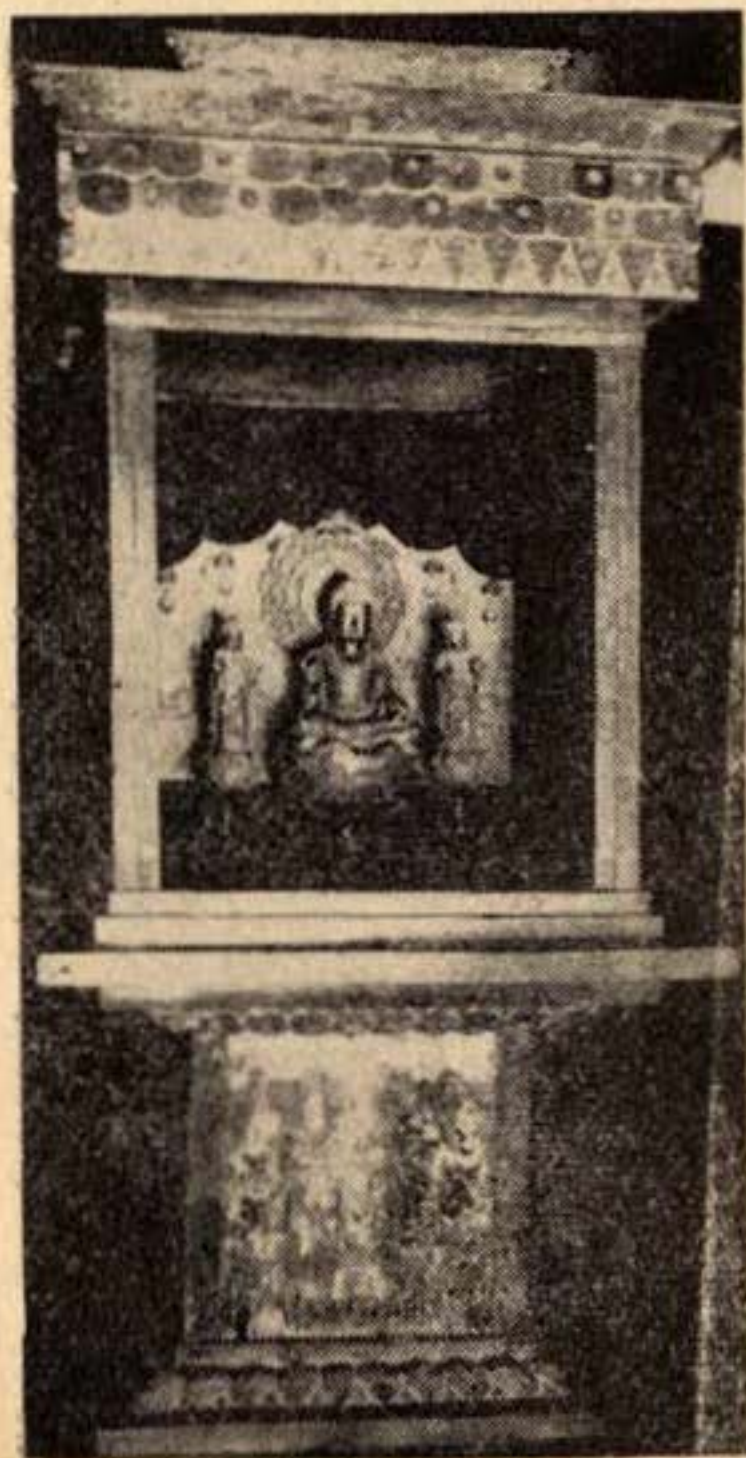
一

淨土教美術とは阿彌陀佛と觀音と勢至菩薩の三尊佛菩薩の正報と、この佛菩薩が住する西方極樂國土の依報と、その淨佛國土(彼岸)に決定往生を願求する往生人(此土)の三部の構想を基に、厭離稱土、欣求淨土の信仰を藝術表象理念として種々の様式手法で造形せられたところの佛教美術を淨土教美術と稱する。限られた紙數の關係上、代表的な作例五點について述べることにする。

二

圖版第一圖は法隆寺金堂橋夫人念持佛銅造阿彌陀如來三尊像である。厨子全體を含めて一の阿彌陀淨土變を取扱つたもので、小さな美しい蓮の葉を浮べた漣波

のリズミカルな座は清らかな阿彌陀佛の淨土の寶池を思はせる。その座板から三莖の蓮華が生じ、中央の蓮華はやゝ大きく開き、その上に圓滿豐婉な相好の阿彌陀佛が結跏趺坐し、左右のやゝ小さい蓮華には化佛を有する觀音と、寶冠



法隆寺金堂橋夫人念持佛銅造阿彌陀如來三尊像

中に水瓶を有する勢至の二菩薩像が侍立している。この三尊像の溫雅流麗な衣襷は白鳳様式の特徴を示し、後屏は蓮華座上に五體の供養天人の姿を精婉に浮彫し、數條の天衣が煙の様に舞い上つてゐる。その座板といふ後屏といふ裝飾意匠の精巧さには驚かせる。誠に奈良朝前期白鳳様式の代表的な阿彌陀佛像である。日本に於いて極樂願生思想が漸く理解され出したのは舒明天皇十二年(西暦六四〇)入唐學問僧惠隱の無量壽經宮中講説に始まり、やがて人々の心に明確にとらえられるに到つたのは天武持統朝頃(西暦七世紀後半)である。佛教美術史上、奈良朝前期の作例としてはこの外に法隆寺金堂西大壁阿彌陀淨土變相書(燒失)と、藥師寺緣起に記載された講堂の阿彌陀佛像并脇士(菩薩)并天人等百餘體の繡佛像一張をあげる事ができる。奈良朝後期に入つては光明皇后が盛に阿彌陀淨土變相を造られた。何づれにせよ奈良時代の阿彌陀佛像は極樂淨土の様子を描いてその中に存在する主尊として觀無量壽經の所設に依つて造像されたものが多いのである。

三

圖版第二圖は京都府廣隆寺講堂の阿彌陀佛像である。この像は奈良朝末期に盛んに行はれた木心乾漆の製法を踏襲した莊重と森嚴と雄偉な氣韻を吾人に感ぜしめる平安時代



京都廣隆寺阿彌陀佛像

前期(弘仁時代様式)における阿彌陀佛像の代表的傑作である。造顯年代は淳和天皇の天長年中(西暦八二四—八四三)と認てよい。この阿彌陀佛像が臺座上に裳懸座型式で結跏趺坐している點と、木心乾漆の様式を踏襲している點と、その印相が阿彌陀說法印である點から弘仁様式に於ける奈良彫刻を繼承した貴重な阿彌陀佛像であることを識つておく必要がある。特にこゝで阿彌陀佛像の印相の形式の種類について述

べておこう。

第一種 阿彌陀說法印 廣隆寺講堂の阿彌陀佛像の様な印相をいうのである。これは左右の兩手を心前にあげて、掌を外に向けて現はし、左右とも大指と無名指とを捻する型の印相で、この型式の印相は阿彌陀佛が極樂國土に於いて普く十方のために微妙の法をお説きになつておる阿彌陀佛の說法相を表はした印相である。これを『說法印相』、『轉法輪印』と稱する。この印相の型にて造顯された他の作例として奈良縣法隆寺傳法堂阿彌陀如來坐像、奈良縣法華寺阿彌陀三尊及童子像、神奈川縣鎌倉光明寺山越彌陀來迎圖がある。この說法印は奈良朝時代の阿彌陀佛像の印相の特色といえる。法隆寺壁畫西大壁阿彌陀淨土變の彌陀の印相も兩手を胸にあげ大頭二指を捻じ、右掌は外に向け、左掌はやゝ内に向けた印相である。これも阿彌陀佛の說法印相で、これに屬する例としては、奈良縣法隆寺金銅阿彌陀五尊鎚鑲像、神奈川縣鎌倉光明寺當麻曼陀羅がある。仁明天皇承和九年(西曆八四二)に入唐し承和十四年(西曆八四七)に歸朝した山城安祥寺の慧運請來の別尊雜記九品曼陀羅の印相圖に圖示されている上品上生の印相も說法印相と解釋すべきである。

第二種 彌陀定印相 この印相は眞言密教の兩部曼陀羅における無量壽如來の印相からでたもので、左右兩手を仰向けて各々五指を相叉し頭指をたてゝその指の背を互いに

つけその指頭に二大指の指頭を横におく印相である。平安以後の顯密兩教を通じて阿彌陀佛像を造像する場合に阿彌陀佛の印相はこの彌陀定印相が極めて多い。別名を『力端定印』と名づけ藤原時代の阿彌陀佛像の印相の特色とされている。代表的作例をあげると、京都府岩船寺阿彌陀如來坐像(天慶九年)、京都府法恩寺阿彌陀堂木造阿彌陀如來坐像(國寶)、京都府平等院鳳凰堂木造阿彌陀如來坐像(國寶)がある。

第三種 彌陀迎接印相 奈良縣往生極樂院阿彌陀佛像の如き印相である。即ち右手を胸の前にあげ、大頭二指を捻じ、掌を外に向けて現はし、左手は膝上に掌を仰向けにおき、大頭二指を同じく捻する形の印相である。これを『彌陀引攝印』、『彌陀迎接印』、別名を『來迎形印相』と稱する。この印相は藤原中期から鎌倉時代にかけて阿彌陀佛像の印相として極めて多く造顯された。これに屬する代表的な作例に、和歌山縣高野山光臺院本造阿彌陀如來及兩脇侍像(快慶作)、京都府知恩院阿彌陀二十五菩薩來迎圖(國寶)がある。我々はこの三種の印相の阿彌陀佛像の各づれをよく拜觀するわけである。

四

圖版第三圖は京都府宇治平等院鳳凰堂の阿彌陀如來坐像である。名匠定朝佛師によつて天喜元年(西曆一〇五三)に完成し

たといはれる寄木造の阿彌陀佛像で定朝様式と云はれる藤原様式の代表的佛像である。我國に於ける阿彌陀佛像中最も優麗な阿彌陀佛像の一つである。定朝は佛師康尙の子である。そして藤原道長、賴道の時代に當り、所謂「佛所」を完成したところの藝術家である。藤原時代の巧匠家達が鳳凰堂の扉に九品來迎圖を畫き、壁面に木造雲中供養菩薩像を作り、淨土三部經の經說に依り寶池には自然の河や池を引込み高層寶閣を構え、全て自然と一つにこの現實の世界に阿彌陀佛の淨土を影現させようとした藤原時代の宗教思想



像來如阿彌陀鳳凰堂鳳院平等治宇

の努力を茲に強く窺うことができる。正に阿彌陀佛は日本人の生活になくってはならぬ存在に高められ、日本人の心に阿彌陀佛は本當に入つて來たわけである。同時に佛教美術も日本固有の理想美にまとめあげられていつた。然もそのかたはら『淨土教美術と行の問題』はたえず進行しつゝあつた。既に源信（九四二—一〇二七）の往生要集の一部臨終行儀の條に基づき、觀念の念佛とはいえ宗教實踐として廿五三昧の結社の流行をみた。日本往生極樂記、續本朝往生傳、拾遺往生傳、百練林等はいく以上のことを物語つてゐる。

五

圖版第四圖は和歌山縣高野山光臺院の木造阿彌陀如來及兩脇侍立像である。この像は鎌倉時代佛教美術における安阿彌様式の阿彌陀佛の代表的傑作である。安阿彌様式とは名匠運慶の弟子の快慶の作をいうのである。その穩健にして秀麗なる立像形式の美しさはやはり鎌倉時代の寫實主義を通してにじみでゝくるもので、頗る端麗な相好をしており、衣襷の線も自由に表現され全體によく整美統一された造像様式である。光臺院の安阿彌様式の像が殊に立像の來迎形式で造顯されている點について述べておこう。故藤田寛雅先生も來迎藝術の發生は藤原末期より上廻つた中期頃と説示され殊に乘雲像（來迎像の一型式）が



高野山光臺院木造阿彌陀如來及兩脇侍立像

坐像より立像となつた點については平安末期以上に廻りがたいと高説されている。又小林剛先生は立像來迎型式は

『瞻西』にはじまると指示された。『決定往生緣起』に瞻西が立像來迎型式の正當性をあたえた事は注目すべき點である。はたして臨終時の本尊として來迎立像を創めて製作した年代が何時頃であるか研究すべき問題である。一般的に淨土教美術の阿彌陀佛像とは藤原様式の往生極樂院の阿彌陀佛並兩脇侍坐像の如き像をさすのであるが、淨土宗義に立脚した阿彌陀佛像となるとそれはいかなる造像様式をさすのであろうかといふ問題について少しく論じてみたい。結論的にはこの光臺院の安阿彌様式の如き來迎引接様式の阿彌陀如來並兩脇侍立像が正に淨土宗義にかなつた阿彌陀佛像であると答へたい。つまり淨土宗本來の阿彌陀佛像は來迎引接の型式を本質とし、立像を立前とするところにある。藤原時代の受動的な淨土影現思想と鎌倉時代になると鑑賞美主義は『淨土教美術と行の問題』に移り急速に進展して、阿彌陀佛と淨土と往生人とをつなぐ三の點が『彼土』と、『此土』を接近させ、やがて『欣慕の心』(善導)は『信の稱名』(法然上人)となり、稱名念佛の行の一點に歸納せられ、阿彌陀佛像是他宗教における偶像崇拜の單なる對境物となる危險から『信』と、『行』によつて全く止揚せられ決して淨土教は偶像教でないことを證明している。法然上人は『逆修說法』において明快にこれに答へられた。また立像が好ましい理由も觀經經所に裏付けられている。鎌倉時代のこうした明朗にして力強い新鮮な淨土教の

信仰熱の欲求によく快慶佛師は安阿彌様式を造顯して答へてくれたのである。

六

圖版第五圖は京都府知恩院の阿彌陀二十五菩薩來迎圖である。別名速雲來迎圖と稱する。略正方形の畫面に向つて左上より右下へ對解線的に急速度の雲に乗つて來迎があ



知恩院阿彌陀二十五菩薩來迎圖

り、左の最下邊に往生人とその庭宅が描かれている。現實的な表現で一きわ大きく描かれたこの阿彌陀佛像は中央よりやや左邊に中心をおいて描かれ前面の飛雲に乗つて下りて來る來迎の一群の畫量とよく均衡をとつてゐる。畫法の妙がそこにある。そして大和繪風の自然の山水の描寫といまつて彼土と此土の二元の世界を畫面に結合させる様に畫き、淨土教美術における三部の構成をよく綜合藝術化している。淨土教美術史上における來迎圖ほど淨土宗義の立場からみて完璧なものは他にないといつてよいのではなからうか。また山越彌陀來迎圖の如く、山をへだてて阿彌陀三尊が上半身を現はして畫かれ、彼土と此土の對境を明分に畫いた構圖は佛教美術史上特異なものである。又この構圖は鎌倉時代にしきりに努力した『動』の表現描寫をよく現はし、速雲來迎圖における『動』の表現が『急』、『速度』を表現しているのに反し、山越の彌陀來迎圖は彌陀の『擴大』『無量』の動をよく表現している。頂度滿月が山に上つた様に、雄大無限の『ダイナミックな阿彌陀佛』をこの圖に見出すことができる。こゝにおいて佛教美術より觀た阿彌陀佛はその窮極に達したといえよう。

童 話

鬼の念佛



内 山 憲 尙

× 徳島縣（四國）板野郡北灘村の折野というところに「鬼骨寺」というお寺があります。古くは「東海山、薬師寺」というのでありました。今では鬼骨寺と言ひならされていきます。なぜこの寺が鬼骨寺と呼ばれるようになったのでしょうか。これについては古くから、おもしろい話が傳わつていきます。

法然上人が讃岐へおいでになる時のことです。ひどい雨になつてきたので田舎の小さな折野というところへ船をおつけになりました。このあたりは鬼野ともいわれ、近くの板西山には鬼がすんでいて、うつかりすると、通りがかりの人に害を加えるというので、こわがつて旅をする人も、この村えは泊りません。

法然上人は一軒のお百姓さんの家へお泊りになりました。その翌日も、又その翌日も雨で船を出すことが出来ず上人はそのままその家へお止まりになりました。村の人は勿論近所の村や町から、法然上人のお徳をしたつて、集まつて來ました。そして、ありがたい上人のお話を聞いて、よろこんで夕方になると一人残らず歸つてゆきました。

× ある晩のこと、おそく、表の戸をとんとたたたくものがあります。家の人が『どうしたんだろう、こんな夜おそくたづねてくるなんて……』と不思議に思い乍ら、表の戸をあけて見ると、おどろきました、そこには鬼が立つていてではありませんか。

「お、おたすけ……」

とふるえあがつて、腰がぬけて動くことも出来ません。

「お願いがあつて参りました……」

鬼は思つたよりやさしい聲で申しました。

「お願い……お願いとは……」

×

×

「法然上人様のお話を聞きに來たのです」

家の人はやつとのことで上人にこのことを申し上げますと、

「それでは、ここへお通し下さい……」

と、次の部屋へ立つておいでになりました。表の戸のくぐりをあけて入つて來たのは、親子四人の鬼でした。

土間に手をつかえて、

「お上人様、夜おそく参りましたすみません。實は、お上人様のお話はありがたいとの評判で、私たちもありがたいお話をお聞きしたいと思つてお伺いしたのでございます」

「それは、よく來ました、遠慮なく、お坐りなさい」

「ありがとうございます。ところで上人様私たちのような悪いものでも、佛様のお救いに預ることが出来るものでしょうか……」

「佛様は、よい人でも悪い人でも、人間ばかりでなく、動物でもお魚でもみんな、佛になる種を持つているものであるとお教え下さいました」

「佛になる種を持つていても、それをのばすのはどうしたらよいのですか」

「それは、ただお念佛を一心にとなえればよいのです」

「私のようなものでも……」

「誰れでも同じです」

法然上人は、阿彌陀佛の畫像を取り出されて、正面へお

かけになりました。

「さあ、これは阿彌陀様のお姿です、この前で、手を合わせて、心からお念佛を申しなさい」

「上人様ありがとうございます」

親子四人の鬼は、阿彌陀様の畫像の前に坐つて手を合わせました。

「南無阿彌陀佛……南無阿彌陀佛……」

鬼たちのお念佛の聲は、夜の闇をやぶつてひびきました。

法然上人はこの様子を御覽になつていましたが、

「お前たちは、いつまでも鬼の姿で、山の中に棲んでいたいと思つてゐるのではないでしょう」

「はい、私たちも、出來ますれば人間の姿になつて、人間の仲間入りをさせていただきたいのでございます。しかし、身體には着物を着るとしても、この角（つの）とこの齒がどうにもなりません。こんな角と牙（きば）があつては、人間もこわがつて、つき合いなどしてはくれません。

「なる程……」

「上人様、この角と牙をとつていただけないものでしょうか」

「むかしから、角と牙とがなくなると鬼は死んでしまふと言われていますよ」

「え、たとえ死んでもよろしうございます。この角があるから悪いことをするので。この牙があるから悪いこと

をします。上人様、お願いでございます、角と牙とおとり下さいませ」

涙をながさんばかり、あまり熱心に申しました。

「では、もつと心をこめて、お念佛を唱えなさい、私も一緒にお唱えしてあげましょう」

「はい、上人様、よろしくお願いいたします……南無阿彌陀佛……南無阿彌陀佛」

×

東の空が明るくなる頃まで、お念佛の聲は続きました。

障子に朝日が、うすあかくうつり始めた頃です。

法然上人は静かに立ちになりました。鬼の頭の上に合掌の手をおのぼしになつて、力強いお聲で、お十念をお唱えになりました。

すると、不思議にも、親子の鬼たちの角と牙は、ぼろりととれて畳の上に落ちました。

「あ、角が……ありがとうございます……」

鬼たちは、法然上人の足もとに、むせび泣きました。

軒では雀の聲もよろこぶように聞えました。

×

この時の阿波の國の國司であつた、小笠原美秋という人は、この話を聞いて、薬師寺を改造して、親子の鬼の角と牙とをこの寺に納めました。それからこの寺を「鬼骨寺」というようになったということです。

合併號發刊のお詫び

雑誌の生命は時事批判と季節感覺とにあるのでありますが、本誌の發刊がおくれて、讀者諸賢の御要望を満たし得ぬことを深くお詫び申します。これには種々の事情がありますが編集當事者としては一意専心前々月末の原稿々切に努力して参つたのであります。然し、新年號を控えて、徒らに手を拱ねていることは誠に申譯けない次第でありますので、甚だ不本意且つ残念なことではありますが、十一月號十二月號を合併號として發刊することと致しました。

讀者の方々には御不満もお有りのことと存じますが、事情御賢察の上御了諾下さいまして、益々御支援下さいますようお願い申し上げます。

尚、これによつて順調をとり戻し、新年號は年内に必らずお手元までお届け致すべく、百方努力中でございます。

昭和三十一年十二月

發行人 佐藤 密雄
編輯人 竹 中 信 常

評

一書

内山 憲 尙 著

學校で宗教をどう教えるか



發行所 横浜市磯子區原町四

日本保育教材株式會社

販賣所 千代田區神田一ツ橋二の三

佛教タイムズ社

品川區西品川五の一〇〇二

日本電話協會

B五 横組一〇〇頁 一五〇圓

人間の精神生活の基礎が宗教に基づいてるかぎり、人間の社會は平和であるべきはずである。それが、近來のような國際的緊張、中東動亂、そして人間生活墮落・危機を目の邊りにみるのは、人間精神の基礎を、何か非常にあやまつたところに置いているところに原因していると思われる。今、世界の大思想家といわれる人、トインビーにしても、ドーソンにしても、ニーバーにしても、すべてのごとを靜かに深く洞察した人が聲を揃えていうのは、人間の運命を切り拓くのことされた武器は正しい意味での「宗教的信仰」以外にはないということである。

人間の精神生活の基礎が宗教に基づいてるの奪起をのぞむ國の場合、特にこのことが考えられねばならない。「信教の自由」は逆の面では「不信教の自由」となつて、宗教輕視の風潮が戦後の教育界にみなぎつて來たようである。うれうべきことである。

然し、實際問題として、「特定の信仰にかたよらず」に宗教を教えることはむずかしい。そのむずかしさをあえて克服して行こうとする教育者は皆無に等しい。みんな一應カリキユラムには宗教の單元を置いて、教室ではうまくまわり道して、さしきわりなしに通つてしまふ。それでは、到底宗教というものを本當に教えることは出來つこない。

私共の國、日本のように、次の世代の人々

この困難な問題に、眞正面からとりくんで

宗教というものを、實際にどう教えたらいいかということ、吾々の前に提示したのが本書である。著者は今更云々する必要のない、幼兒教育の權威、宗教童話のベテランであり、宗門にとつてはかけがえない大家である。公私數十にのぼる職務のいそがしさの中で、一般の要望に應えて著者が公けにされた本書の意義は頗る大きい。

内容的には、宗教の何たるか、兒童の宗教心理の概要等を序説的に述べた後、宗教々育史、社會科における宗教、宗教科と教育課程、學習指導・單元等、實際の場における手引として、そのままに活用出来るプランで筆をすめておられ、最後に、佛教々育學、佛教々育の實際といったところで終つてゐる。

評者自身宗教心理學を専攻し、兒童の宗教意識などに研究の指を染めたこともあるが、怠慢にして、これを現實に活かす道をまだ立てなかつた。この時、本書を得たことは、まことに感を深うして、通讀、卷を伏せることがなかつた。ねがわくば、宗門において教育にたづさわつていられる方、乃至、教育に關心をお持ちの方、更には佛教自體の持つ教育的意義に目をむけられる方には、是非とも一讀されんことを切望する次第である。(竹中)

金光上人感得靈像をお守りして



工 藤 昌 瑞

弘前西光寺本尊阿彌陀如來は、元祖法然上人の直弟金光上人が靈夢により、奥州外ヶ濱の一小河で感得した尊像であるとされて居り、地方的の傳説に残されて参りました。

それが昨年青森縣文化財保護委員會の採り上げる所となり、東北大學龜田孜教授の鑑定などありまして、今年五月十四日付を以て縣重要文化財に指定されました。丈一尺六寸三分。木造。漆箔押の立像で、蓮臺は高さ八寸五分、胎内にコロ／＼の納入物があります。同教授は、「細かい個所に神經をつかつた桂材の地方作である。袈裟のつけ方が胸元を狭く見せ、裾で擴がるように作つたり、肩から吊る紐の鑲座を彫り出したり一風變つてゐる。……大粒螺髪を作つて耳の邊に至つて漸減させ、まるで數珠玉でも連ねたよう

な面白い作」とその報告書に述べています。私が少年時代一度この秘佛を撮影しました時、始終お寺に出入して居た婆さんも畏る／＼る拜みながら見て居ました所、翌日お腹が痛いとして、まともに尊像を拜した罰だなどと云つて居た思い出があります。

道重大僧正の普濟遺文に、「ほゝ笑の佛とにこにこの佛、ほゝ笑は未だ綻びざるもの。にこにこは已に綻びたるもの。にこにこの佛像の好標本は、木喰上人の製作に於て之を見る。ほゝ笑の佛像に至りては、極めて少く僅かに平安朝以前の靈像に於て見るばかりである。弘前市西光寺の金光上人感得の本尊は確かに其の一つである。」と書いて居ります。道重大僧正は大正十三年弘前御親教の折親しく西光

寺本尊如來を開帳拜瞻致して隨喜の至誠を當時の住職成田昌信師の許に親書を送り、金一封を下されたものであります。當寺縁起によりますと、津輕藩祖爲信公が、諸城を陥れて津輕一帶平定の後一日鷹狩りを致し、たまたまこの庵に御休息なされ、本尊様を拜しますると、朽ちたる草庵のみすばらしさにも似ず、誠に相好圓滿にして慈眼溢るゝ如く我を見下す御姿に、思はず知らず襟を示して本尊様の由來を住持に尋ねたのであります。

さて金光上人は筑後國竹野郡石垣に生を享けた方でありますが、實は捨て子でありました。養父は竹野の長者及鷹公といはれる方で四十歳を過ぎて嗣子のないことを憂い、石垣山の奥坊の觀音堂に參籠していよく満願の曉に聖者



西光寺本尊阿彌陀如來

の靈告を蒙り、久壽二年二月十八日邸の巽の方の森の中で男の兒の泣き聲を聞き、これこそ觀音様のお授けものであらうと、拾い懷き家に歸り、夫婦の愛撫を傾けて育てられました。幼名現若。明敏な生稟と相俟つて里人に神童と尊ばれ、七歳高良山の御井寺精覺律師の許にて學問にいそしんで居ります。十一歳母方子の方の逝去に遭い悲嘆やる方なく、父の慰めも誠めも耳に入らず、たゞ一ずに母君報恩の爲め菩提を弔はんとて出家しました。十三歳の春叡山に登り惠光坊圓輔阿闍梨に就き、名を金光房と改め、台教の奥義を究め、文治二年三十二歳で僧都に補せられ、特に命を拜して筑後國勅願所石垣山觀音寺の別當職となられました。この觀音寺は名利として七堂伽藍の輪奐を以て誇りしも、當時は既にその面目を保ち得ぬ經營困難の爲め、金光上人は時の政府鎌倉に窮狀を訴えて支援を求めたわけであります。然るに意の如く進まず、徒らに日時を過して行きました。當時鎌倉には安樂房が念佛門の宣教に當つて居りました。一夜石川禪門道遍（澁谷七郎）の宅に於て、安樂房を圍む信仰座談會の席に招ぜられ、而も當夜の領解の筆記を請はれました。元來眞俗兼備の學問教養を深く身につけられ、而も後に親感入道見佛という人が御師匠法然上人に、「御往生の後には淨土の法門に於ては不審の事をは誰人にか問申すべきか」と問はれたのに對し、上人は「聖光坊金光坊委しく所存を知れり」と稱美の言を致されて居

られる程の御器量でありましたので、宿習忽ち開發して淨土門に入り、寺務の訴事を捨て直ちに吉水の禪房へと急ぎました。師上人も深く金光房の法器に感じ入り、宗義を語り終に往生淨土の秘蹟サツを授けられました。正治初年上人の命を拜して東國念佛弘通の旅に出られました。その足跡は現在金光上人を開基又は中興とする遺蹟を詳しく調査し、且つその當時の交通事情を更に詮索する事等による今後の系統立つた研究に俟たねばならないのでありますが、残された傳説及び各寺の緣起等の資料によつて見當をつけて見ますと、會津地方から宮城、南部、秋田それより津輕へと旅路を跡付けることが出来るようであります。この中宮城往生寺に残る眞似牛の愚夫濟度の傳説は、本誌昭和二十六年二月號に、大橋俊雄師の記事が詳細にのべて居りますからそれに譲ります。只こゝで一言後日譚的に附記さして頂きますが、その牛の眞似した愚夫は自らの淺間しき心を恥じて出家し正牛と名乗つて金光上人のお弟子となつて見ります。そして正牛塚は岩手縣遠野の善明寺にあると申されますが、西光寺緣起には、「南部に於て東野（遠野）の善明寺建立の時、授戒念佛結緣濟度の砌、異相の人來て金光上人に受戒を願いましたので、金光上人は「戒を受くる時必ず名前があるものですが、あなたは何所の何という方です」と問いました所、その異人の曰く、「我は是れ海中に住む龍神善明である」と聞いて、上人は爲に圓頓戒を授け

ました。龍神はその御禮として龍宮より梵鐘一口を獻じた」とありますが、この事から上人の道譽は益々普く布かれ遠近その徳に歸依し、念佛の教は一步／＼みちのくの奥へと深透して行くのであります。次いで花巻に廣隆寺、秋田に法幢寺、金光寺を開き、承元年中或夜の夢枕に、阿彌陀如來の尊形現はれ、「汝外ヶ濱に至れ、必ず逢はん」と、夢さめて不思議な思ひをなして、いよ／＼本州最北端への決意を固め、その四年四月とう／＼目ざす外ヶ濱への第一歩を踏んだのであります。その頃蓬田村に一小河あり。東に流れて水淨くありましたが、夜な／＼川の面より光を放つものがあるとの噂を聞いて上人は深く心に期するところあり、その日はおそいので一漁家に宿を求めました。この家こそ小鹿三十郎とて今も尙榮えて居ります。翌日人を集めて貰い、河中を探らせたのであります。そして遂に夢のお告げの如く阿彌陀如來の尊像を得られました。それよりこの河を阿彌陀川といふます。金光上人の感激如何ばかりでありましたらう。粒々辛苦の旅が都を、師匠遠くを離れても、この尊像によるよろこびには遙かに及ばぬものがありましたらう。目の當りこの有様を目にした村人達は思はず合掌念佛の聲を稱えたとあります。上人は勇氣百倍、この尊像を背負うては、梵珠山にある靈地を再興して一寺を復し、妖怪を去らしめたり、悪い大蛇を改悔させたり、或は旱天に祈願をこめて慈雨を降らしめ、病める農

民を快癒させたりなどという御利益の數々が傳えられて居ります。長六という信士が上人の頭上から光の放つを見て出家されたなどは、當時の無知蒙昧の邊地に於ける上人の徳化と、分り易い念佛門の字義とその實踐とは、波の打ちよせるが如くに、口から口へと傳はり、人々の心に無上の明るみとなつて稱えられて行つたことの一つの生きた例に外ならないのであります。金光上人は最後に當時の津輕の豪族安東家の居城たる藤崎及び浪岡に庵を定めていよく念佛の弘めを致され、新興宗教としての念佛家に對する外部からの壓力にも敢然身を張つて迫害を乗り越えて行きました。然し人間の力には限りがあります。日來の所勞増氣し遂に建保五年三月二十五日、庵の中に異香薫じ空中に天樂あり、頭北面西にして高聲念佛の裡に眠るが如く往生を遂げられました。世壽六十有三。遺命により遺骸を東の陵に葬り今に金光塚と稱して七百四十年の間東奥の地に無言の念佛を授け續けられて居ります。後浪岡は奥州國司北畠顯家の所領となり、お殿様の御信敬を得まして五本松という所に一字を建立し亡き金光上人を開幕として行岳山金光院西光寺と稱した譯であります。天正六年には北畠氏は津輕家に滅ぼされ寺も荒れたところへ一日藩公の鷹狩りあつて、藩公は爲めに別に三尊佛を下され且つ十三石の佛供田迄賜はりました。二代信牧公の時弘前城築城され寺々を城下に移轉する儀ありまして西光寺又浪岡より弘前に移つて

現在に至つて居ります。

金光上人の事蹟等に就き古來不明の點多々あります。或は會津に、或は宮城にて寂すなどですが、外濱傳説はこの地の郷土史家も金光塚などに立證致して居ります。青森教區は宗祖七百五十年御忌記念事業の一環として特に乏しい中から費用をさいて研究會を組織して、一致協力上人の顯彰と研究とに當つて居ります。私のこの記事も研究會の方々即ち佐藤堅瑞師、遠藤麟導師に負う所であります。尙今後共各教區の方々の御批正御鞭撻を頂きまして、東奥念佛弘通の祖金光上人の全貌が得られますことを期してやみません。

新會員紹介(其一) 順不同

神奈川	三寶寺様	秋田	山形	栗山眞英様
茨城	荒井庄太郎様	福島	昭光寺様	
栃木	梅澤定吉様	長野	水野浩善様	
北海道	日露龍彦様		藤森源信様	
青森	飯田恒吉様		武田直子様	
	問山泰宣様		兒平達旺様	
	佐々木法導様		伊東春生様	
	玉泉院様	岐阜	宇都宮俊定様	
	光臺寺様	三重	石川清美様	
岩手	富山英韶様	愛知	山田説勇様	
			善光寺様	
			靜永秀雄様	
			多氣直三様	
			地藏院様	

眞葛ヶ原問答

第二部

萩行建堂

後 席

登上人物、前に同じ、観音冠を換へ勢至となる。

囃子——面白調にて、困つた——と云ひ乍ら甲乙、左右より登上、

△甲、本尊様を指差し

甲「宇宙大生命の 阿彌陀様」

乙「木造の姿を借つて、易く法を表はす」

甲「この佛を拜めば、生かす法を拜む事になる」

乙「そうだ——拜めばよい——」

△兩人、本尊前に坐り禮拜を續ける。其處へ、勢至、合掌歩

行調にて入室、兩人の側に立ち、不審相に眺める、

勢「コレ——お前達、コレ」

△兩人、菩薩に氣付き、禮拜を止め、勢至の前に坐る、

勢「お前達、何をして居るのじや」

甲「佛様を、拜んで居ます」

勢「ホー、では——なぜ拜む」

乙「なぜつて、——一體、貴方様は、何方様で御座いますか」

勢「ワシは勢至菩薩ヨ、法然房の本地だヨ」

甲「エー、勢至様で御座いますか、道理で、むずかしい事をお聞きになると思ひました。なぜ——拜むか——なんて」

乙「佛様ですから、手を合せて拜みます」

勢「どうして、手を合せるんかノー」

甲「佛様を拜む作法ですワ、——心が、そう、させるんですワ」

勢「心かノー、では——その心とは、何んじやいノー」

乙「心つて——、心ですワ、固く言へば精神とか、泣いたり、笑つたり、話したり」

甲「ウン、それに、靈性と云つて——心に拜む性が備はつて、居るんですワ」

勢「ホー能く聞いているノー、靈性は、佛性の代言葉じゃ、——ではその佛性とは、どんな、もんかいノー」

乙「エ、先程、觀音様から、お前の本心は、どうじゃ——と聞かれ今は、なぜ拜む、佛性とは、何か——と聞かれる」

甲「解つた様で、解らない、聞かれると、返事も出来ん——」

△兩人、頭を抱へる

勢「その拜む譯は、お前達の、その心を、よく——見極めると解るのじゃ」

甲「へエー、私達の心を」

勢「それでは聞くが、お前達は、心を持つているノー」

△兩人、ゲラ——笑い出す

乙「勢至様——心があればこそ、お話も承はる、——家の事も、外の事も、あれも、これも、——一切——心で考へます」

勢「よく働く、大切な、心じゃノーでは、その大切な心を、大切に——してやるには、どうすれば、よい」

甲「心を大切にする？ それは、心の思つた事を、思つた様にしてやれば、——例へば、食べたい時に食べ、寝たい時に寝る、そうすれば、心に、不平不満は、ありません」

勢「ところが、その食べたい時に、食べられず、寝たい時に寝れなかつたら——さぞ——心は怒るであらうノー」

乙「そうです、私達は、心の中で、あれ、これと、都合のよい事を思つて居りますが——世の中は——儘にならぬ事が多くて——辛抱——勘忍——で、日を送つています」

勢「そうじゃノー、それで、その辛抱し乍らも、——これでも今に——と希望を持つて、日を送つて居るノー」

甲「ハイ——、その通りで御座います、でも、——お金さへあれば——」

勢「何を申す、今が大切な、心の定め所じゃ、金の有る無しを炬う心と、拜む心とは、全然その主が別じゃ」

兩人「へエー」

勢「世間には、拜めば儲る、病が治ると説く者が居る——が——これは目に見へぬ法の應用で、普遍的な確證が無い、かへつて見へぬ事を利用して悪用する者が多い、正見の外れた責任の無い教である」

兩「へー」

勢「外に、利益を求めて、佛を拜むで無い。汝の心に佛を拜む因縁あればこそ、拜むなり」

甲「エー、何ですつて」

勢「拜むには拜む原因が、お前達の心にある。例へば、お前達の喜び、悲みには、それ——原因がある様に」

乙「ハ、知つていますよ、その拜む原因は、佛性で御座いましよ」

勢「否々——、佛性、靈性は、十方の諸佛に通ずる性なり、阿彌陀一佛に通ずる性にあらす」

兩「へエー」

勢「阿彌陀一佛に通ずる、その性を知る事が、阿彌陀一佛に通ずる自分の本心を知る事になる」

兩「どうか、その原因を、教して下さいませ」

△兩人、膝を乗り出す

勢「それは、生けとし生ける人々に、平等に備はつてゐる」

甲「エー、皆に、平等に——變ですネ——顔、形の違ふ様に人の心は、みんな違ふと云ひますが」

勢「さよう、それは正しい、世間の言葉に、業は、てんぐと申すからノー」

乙「ハイ、その様に、人の心は違つています」

勢「さて、先程話した様に——人の違ふ心には、違はせる原因がある譯だ。お前達の心には、絶へず移り變る心と、その變る心の原因となる、變らざる心とがある」

甲「變らせる心つて——」

勢「變る心の原因で、而も、生涯お前達を、生かさせる一番大切な心じや」

兩「それは、どんな、心で御座りましよ」

△兩人、膝を立て、恭敬相

清「變らぬ心とは——宇宙大生命が小さく顯れて——いつまでもよく生きたい——の心となつて、人に宿る。生きたい——のたい——とは、願なれば、——よく、いつまでも生きたい——の願心はその變らぬ、心である」

兩「へエー」

勢「この願心こそ、彌陀一佛に通ずる拜む原因であり且又お前達の本當の本心である」

甲「ホー、いつまでも、よく生きたいの願心ネ」

勢「間違ひなく持つて居るノー」

乙「ハイ、確に持つて居ます、態々貴方様から聞かなくとも、その心あればこそ、細々乍らも、生きてゆく氣にもなり、又元氣

も出てくるので御座います。

勢「さよう、皆の、よく知つて居る心、誰れでも持つて居る心。それで——それと、氣付かぬ心、迂闊に聞けば、平凡極まる心なれど——その心こそ、統合の心、汝の彌陀に通ずる唯一の本心なり」

兩「へー」

勢「その願心、あればこそ、假令、十方の佛、來らずとも——阿彌陀如來必ず來り汝の願心に應同し、汝の前に、立ち給うなり」

甲「南無阿彌陀佛——」

勢「コーレ、早まるでない、ワシは、たゞお前達の本心を、正しく開き示せしのみ。その本心は、善に非ず、惡に非ず、善惡を超へた法爾の心、——如來心の御影なり」

甲「阿彌陀様の御影——、本當で御座いますか——今まで私達は、罪人じや、惡人じや、その本心は、五欲の固り、三毒の集と聞いていましたか」

勢「それは、果つる事の無い、人の變る心を説いたものじや、變る心に、己が身を委せ切れば、五欲の誘ひ、忽に來り三毒——引いては、惡人、罪人の名、亦起る」

兩「ハイ——」

勢「この本末を混同してはならぬ。本は、いつまでも、よく生きたいの、變らぬ心、吾も然り、彼も然り、共に、よく生きたいの願心なり」

兩「ハイ——」

勢「さて、——その變らぬ願心を、専門語で、簡潔に、南無の二字で表わす。皈依とも、皈命とも譯す」

兩「ハイ——」

私共の考へが、考へるものに專注出來ないのは、今述べたやうに身心の感覺や感情で心が散亂するからですが、このやうな心をば散心と言ひます。散心では、正しくものを知る悟りの智は發生しないのであります。悟りに導く智は定心（じようしん）から生ずるものです。定とは心を整へて感覺や感情の支配を受けず、一定の目的に心を專注せしめることで、その働きを心等持と言ひます。心を一定の状態に維持して、完全な悟りの智の發生を促すのです。

通常、佛教の實踐道は戒定慧の三學からなると言はれて居ます。この三學の中の第一の戒學と言ふのは、正しい生活をして身心を整調することでありましたが、それは第二の定學を成立する爲めです。そして定學と言ふのが上述の感覺や感情に影きようされない定心の状態を生ずる訓練修習のことを言ふのであります。定心の状態は禪定とも言ひますが、印度の言葉で定はサマーディであつて、音譯して三昧（さんまい）と言ひます。例へば人が讀書にふけつてゐる時には、これを讀書三昧にあると言ひますが、これは他のことに心を散さずに専心讀書に徹して居るのを讀書の定にあるに譬へてゐるのであります。このやうな定心の状態で釋尊の説かれた四諦の教へを觀念し、或ひは唯心の理や眞如の世界を思念すると、それ等に對する無漏の教智が得られるのであります。

悟りはこの無漏智が擴大して、生存の一切が感情や感覺

に支配されるやうなことがなくなり、無漏智のみで生きるに至つた時に成立するものであります。このやうな無漏智の擴大が修道と言はれるのです。

定の様子を譬へた話があります。昔奈良の寺に老僧があつて、毎日坐禪堂に入つて定を修習して居たが、その入定の間は弟子に堂に近づくことを禁じて居りました。所がある日弟子の一人が禁を犯して坐禪堂に近づき堂内の様子をのぞき見ましたが、不思議なことに堂内に老僧は見當らず、あたかも深淵のやうになつて水が堂内一杯に満々とたたへられていたのです。驚いた弟子は大石を持つてその中へ投げ込むと、石は水音を立て長く餘韻を引いて沈んだのです。然し、しばらくすると堂からは老僧がきづついた頭を押へつつ出て來たので亦た驚いた弟子は、堂の中を見直すと床上に老僧の坐して居た坐具があり、弟子の投げ込んだ石が轉がつて居たと言ふのです。

これは、老僧が「一切は水なり」と言ふ觀念に入る水遍定と言ふ定を修習して居たのを説話化したものです。實際は説話とは逆に、滿堂が水になつたのは老僧の主觀々念の上で、他人からは坐具上に坐して定をする老僧の姿が見られた筈ですが、老僧の主觀を客觀化して知らしめる爲めにこのやうな説話にしたものと考へられます。

この、老僧が水に化した話が象徵するやうに、定とは、主觀的にはありますが、觀念を觀念する對象になり切ら

勢「皈依、皈命の内容は、その願心なり。よつて、南無の二字には
お前達の、本心が籠つてゐる事になる。いつまでもよく生きたい
の本心がノー」

兩「へーハ、ハイ」

勢「既に、觀世音菩薩の慈悲にて、第十二光明、第十三壽命無量の
願滿足の阿彌陀如來が説かれ、今、この勢至の智慧にて、その願
に應ずる、汝達の本心が開顯された。佛を知り。己を知る。然れ
ば、拜む理、自ら明かなり。自ら思惟すべし」

△勢至、合掌、步行調にて退堂、

兩人腕を組み、思案、

甲、本尊様を指差し乍ら、

甲「佛を知る——エート、宇宙大生命の表象」

乙「生き通しの無量壽、よきに／＼の無量光、——それは阿彌陀如
來だ」「自ら生き而も、一切を生かす」

△乙、胸を指差し乍ら

乙「己を知る——エート、自分の本心、善惡を超へた法爾の心」

甲「それは、いつまでも、よく生きたいの願心なり」

乙「佛の願ひは、生かす一心、私の願ひは、生きたい一心」

兩人「そうだ／＼」

△兩人、歌

生かすがあるから、生かされる、二つは離れることは無い、
生きたいがあるから、生きさせる、二つは離れる事は無い、
二つの本は、たゞ一つ

甲「佛と私は、同じ大生命の現れだ」

乙「生かす佛は、阿彌陀佛、される私は、南無の二字」

甲「される受身の私は、生かす佛を仰ぐなり」
兩「ウム、仰ぐなり、拜むなり」

△兩人、暫し間を置き、眞顔にて

甲「南無の二字に、彌陀の四字、生かされ、生きると讀まれるぞ」

乙「南無阿彌陀佛の、お六字に、私と佛と一體だ」

甲「彌陀の四字に、私の南無の二字が戴つて居る。これでは、生き
／＼活きる筈」

兩「解つたぞ——悟つたぞ」

甲「南無阿彌陀佛の念佛は、生かされ、生きる姿なり」

乙「南無阿彌陀佛は、生きてゆく／＼、大生命力は、生きてゆく」

△兩人、合掌、讃歎

阿彌陀、阿彌陀佛、阿彌陀佛、

生かされ、生きゆく法の身は、南無阿彌陀佛に顯はれり光明
名號憶念し、稱名、聞名、常として
よきに／＼と生きてゆく、

私の阿彌陀、阿彌陀佛

△兩人、合掌、互禮、步行調にて、左右より退堂

以上

×

×

×

×

佛 教 入 門 (その九)



定 について

佐 藤 密 雄

(一) 定 心

佛教は悟りの宗教であります。永遠の道理を悟つて佛となる教へであります。宛も釋尊が菩提樹の下で成道して佛となられたやうに、すべての人が佛となるべき教へであるのです。然し乍ら、悟りと言ふことは、單に知り理解することとは違ふのです。知るのでなくて、そのものになることです。世界の根本となる眞理を悟ると言ふことは、世界の眞理となつて生きることでもあります。私共は、今有限な身心を自身として生きて、身心の感情や感覺に従つて有限の生存をつづけて居るのですが、すべてのものを生滅する永遠の眞理を悟ることは、その眞理になつてこの有限の身心を充分に活用する立場に經ることになるのであります。

既に幾つかの佛教理論を述べましたが、これ等の理論は私共を、眞理の悟りへ導く觀念の仕方や理論のたどり方を明にするものでしたが、悟りはただそれ等の理論をたどつてこれを理解しただけではいけないのです。

悟りを得る智は無漏智と言ひますが、それは私共の日常の知識とは異つた状態で發生するものです。私共の日常心は、或ることを考へて居ても、感覺や感情が伴つて、純粹にそのことをそのことのまゝに受け入れることが出来ませんし、又考へることに徹底して、他に心を散らさずそのものになり切る状態に置くことも出来ません。感覺や感情の伴つた知識はこれを有漏智と言ひます。漏は知識を不能にする感覺や感情のことです、いはゆるる煩惱のことですがこれが伴つては感情や感覺に支配された知識であります。

せて、なり切つた状態を、如何なる感覺上の刺激にも、感情にも動揺されることなく等持すること、例へば火を觀念するものには、火そのものとなつて、火以外に自身はもとより何物もない状態を定の期間中つづけるのであつて、その状態のつづく間を定と言ふのであります。

聖徳太子は、そう明であられて、十七人の訴へを一時に處理されたと傳へられますが、これは定から言へば、散亂粗動心となり、俗的そう明さとも言ふべきで、定智にはありません。定心は心一境性と言はれ、一つのことを觀念して、そのものになり切つて主觀と客觀との不二になることです。

佛教の智の最後を能所不二と言ひます。能とは能觀の智の意味で、智る主觀の働きであります。所とは所觀の境、即ち客觀の意味で、智られる對象であります。つまり識るものと識られるものですが、この識る主觀と識られる客觀とが一つになつたものが不二であります。眞如とか實相とかの、佛教眞理と言はれるものを體得する意味の箇所では必ずこの能所不二の文句が使用されて居るのです。

(二) 定の修得

定は修習を重ねてマスターするものですが、定に入るにも、定の爲めの豫備訓練を重ねてそれに入るのです。今日の禪宗でも用ひて居る破卵觀とか數息觀とかは、定を得る

爲めの訓練であります。

定を得る爲めの訓練をするにしても、先づ前提として身器清淨でなくてはなりません。これは身心を清らかにすること、具體的に言ふと、惡友から身を遠ざけ、衣食住の現狀に満足して知足するのです。これは大乘小乗の區別なく、佛教を通じての入門の第一條件として要求されるものであります。極めて簡易で卑近なことのやうで、仲々に行じ難いことでもあります。然し、これが出來なくては、佛教に入ることが出來ないのです。

身器清淨となつた人が、定に入ることを求め得るのですが、そのやうな人が、數息觀等を試みるのです。數息觀は自分の呼吸を數へることです。出息と入息とを合せて一つにして數へてもよく、又た出入を二つに數へてもよいのですが、一般の散心のものには五十の息を連續して數へるとも仲々容易ではありません。これを繰返して、精神の平靜と一事に觀念を專注して、その間に他へ心の散らぬ訓練をするのです。破卵觀と言ふのは、先づ一つのけい卵を頭上に置いた思ひをして、これを頭上に安定せしめる様に姿勢を整え、安定した所で、頭上で卵を破ります。そして破れた卵の液體が頭上から體の全面を傳つて下るのをゆつくりと觀念するのであります。

數息觀にしる破卵觀にしる、いづれも心を平靜にするとの修練が第一で、それについて觀念を一事に專注すること

ととの修練をなすものです。

人間には、貪行者と言つて衣食住や性の欲求の強いものがあり、又た瞋行者と言つて他をねたむ心の起り易いものがあり、其の他の性格があつて、例へば、貪行者は心を平靜にしてある一事を思つて居ても、肉體の調子や環境の状態で、食欲なり性欲なりの刺激を受けて心を亂し勝ちになる。其處で、貪行者でも、特に肉體的欲望の起りやすい人は不淨觀をなして、最も起り易い欲求を制御して心の亂れを防ぐのであります。不淨觀にも種々ありますが、例へば骨鎖觀と言ふのは、人間の身體を骨の集合と見るのです。

いつ頃から出來た圖柄であるか知りませんが、卒塔婆小町と言ふ繪があります。一代の美女であつた小野小町が、次第に老衰して、やがて死屍となり最後は數片の骨として野ざらしの中に散らばり、側に一本のかたむいた卒塔婆があるのみと言ふ状態になることを繪にしたものですが、これは不淨觀に依つて描かれたものに外ありません。不淨觀は異性の身體等に欲求を生ずるものや、自身の肉體に執する貪行者の欲求を一時的に制伏する方法ですが、人間の性格は多數ですから、その行法も多數です。セイロン等の南方佛教では今日でも、古い仕方そのままに行つて居るのですが、不淨觀を入れて四十もの修練方法（四十業處と言ひます）があつて、行者は自身の性質を反省して一番適切なものを選んで行はねばならぬとせられて居ます。

先きに述べた昔の奈良の老僧のなした水遍定と言ふのも四十種の修練法の一であります。

(三) 神變と神通

神通又は神通力と呼ばれるものがあります。善導大師の極樂を願ふ發願文の中にも、極樂に往生して六神通を得てこの世界へ還り來て一切衆生の苦を救ひたいと言ふ願ひが述べられてありますが、神通若しくは神通力と言ふことも定の修練の產物で、神通が出来るやうな定になる迄修習すると、悟りの智力が発生します。

神通のやうなものに神變と言ふのがあります。これは定の修練が進んで、一切は水であると考へると一切が水となり、自分は童子であると考へると童子になることが出来る、とされるものであります。日本の忍術の火遁の術や水遁の術の如きは、この考への轉化したものと考へられるし、又た印度の行者が死する時に火定に入り、自身で火を發して火亡し去つたとされるのも、この神變の考へからそのやうに言はれるに至つたものと考へられます。然し、この神變は既に述べた水になつた老僧の話のやうに、入定者が主觀的に、觀念的に水や火を觀念して水や火になり切ることを客觀的に事實的にそのやうになつた如く説くものであります。従つて神變とは定の修練が主觀的に進んだ状態であり

但し、古代印度では、超人的な神が事實上の神變を行つたと考へて居たやうですが、これは然し、神話の世界のこととて、修道上のことではありません。

神通は神變とことなつて、定から發する智力であつて、悟りを得る智に役立つものであります。神通は「完全な智」若しくは超越智と言ふ意味の文字で、一般の智力を超えた完全智とでも名づけるべきものです。

神通の代表的なものには、天眼智、天耳智、他心智、宿住隨念智と言つたものが區別されます。天眼智とは、一般人に見ることの出来ない巨大なこと極小なこと、遠い所のことを見ける智力で、天眼通とも言ひます。天耳智は天眼と同じ意味の聴き知る智力であるし、他心智は他人の心を見る力、宿住隨念智は他人の過去の經歷を明に知る力で、俱に他人を教化するに必要な力であります。神通力は此の四種に分類されるだけのものでなく、この四種に見られるやうな有り方で、識らんとすることを自由に完全に知らしめる能力を言ふのであります。

以上に依つて、佛教の悟り得る智は、一般通常にものとを知識することとは異なる意味と、その悟りの智は定心から發生することと、更に定心から發生する智は神通智力を伴ふ完全智であることを述べたのですが、實は、このやうな智を自力で完全に生じて佛となつたのは釋尊であつて、釋尊の外には、恐らく舍利弗とか目蓮とか大迦葉とかの大

弟子達が、釋尊の教導支持で、この智力で悟りの智を得たものと考へられます。然し、歴史の降るに従つて、理としては修し得る定でありますし、又た定を修せば得られる神通智力であります。それを得るものは稀であつたやうです。大乘でも小乗でも、佛道修習のことを止觀と言ひますが、止とは定のこととて觀とは定心で眞理を觀じ悟ることとあります。然し、大乘の學人は皆な眞理の悟りは止觀に依つて得られることを説くのですが、然し歴史上の學人で實際に止觀を完成された方も、多くはないのでないかと考へられます。

そこで私共は、聖道止觀の修習は、全くその修習のみに生涯を捧げる出家聖者達にも、不可能でないが然し容易でないことが知られるのです。まして世俗の生活を生きつつ佛の道を得んとする一般人や、一般人の先達にすぎない僧達には、容易に出来ることとは申せません。

然し、聖道の行先にある悟りの榮光は、ただ佛のものでなく、榮光を得た佛が萬人に得せしめんとせられるものです。ここに、信佛の因縁に依る他力易行の道があります。淨土の教へがこれであります。(終り)

長い間御愛讀頂きましたが、本號を以て最終回と致します。説き明かすことの出来なかつた事柄も多いことですが、それは次の機會にゆすることとして一應筆を置く事に致します。

鑽仰會メモ

二月十日 宗教座談會 ところ宗務所會議室、出席者は、早大教授文博仁戸田六三郎先生、作家高瀬廣居氏、もと、こけし座團員内山房子さんの三氏に、本會より竹中先生(司會)梅津、水谷、宮林の各氏。この種の座談會にはめづらしくバラエティに富んだものであり、現代の世相の解剖、マス・コミュニケーションと宗教の問題、平和論、念佛の現代的意識等の問題を中心に延々四時間に亘り討論談合がなされた。(本年度四月號掲載)

二月廿四日 研究會、教學院の主催する研究發表例會は、東大教授結城令聞博士を招いて「法然教學と教行信證」と題しての發表をうかがつた。

四月十二日 研究會、本誌にも馴染深い、教學院研究所長大野法道博士が「淨土宗と戒律」というテーマのもとに、長年に亘る研鑽による新しき開拓的面の發表をされた。

四月廿日、淨土の會、一泊二日の清遊をかねて行われたこの催しは、終始心温まる有意義な企てであつた。伊東の青山莊に一泊、翌日は、天城越をして修善寺を経てのコース。

出席者は佐藤賢順、佐藤密雄、佐藤良智、中村、竹中、水谷の各氏。

四月廿一日 吉田絃二郎先生逝去。バルキソン氏病で入院加療中、手術後経過調わず、遂に七十一才の生涯を閉じられた。本會創立以來廿餘年の長きに亘り断えざる御援助をいたゞいた先生を失つた事は、何より痛惜に堪えないところである。

五月十九日 研究會、「南方僧伽の戒律生活について」發表者は、白幡憲佑氏、氏は一年間ビルマに留學してテラバーダの教團生活を具さに經驗されてきた方である。

六月九日 淨土教學大會、九、十の兩日、名古屋市建中寺において、淨土宗教學院、佛教文化研究所共催により、百餘名の東西の學人が相集い熱心に研究發表及討論が行われた。宗門内外の要望と東西學徒の學問の交流の必要性にかんがみ第一回の教學大會は昨年京都、知恩院において行われたが、今回はその第二回であつた。

八月廿一日 「淨土の集い」講演會、會場、信州善光寺大本願、戦前は各支部に先生方が出講して信仰座談會とか、講演會等もひんばんに行われたのであるが、戦後は諸般の事情で中断されてしまつた。この度、幸い竹中先生が教區の講習會に出講されたので、それを機会に、本會より、佐藤密雄、佐藤良智の兩先生に編集部より宮林、水谷兩氏出席して一夕「淨土の集い」を催した。參會者は八十名程であつたが、みな熱心に聴講質疑され、とくに佐藤密雄先生の「現代と淨土」なる講演會は仲々の反響があり、あとの懇親會の席にまでもあ込まれるほどである。この様な催しが年々盛んに行われる事により、本會の所期の目的が達せられるよう希われた。

九月十四日 孝道教團本部見學、戦後活潑に教團活動を續けている新興宗教の中、今回は孝道教團(横濱)を見學し、實地調査研究を行つた。教團の機構、組織的方面ではシサされる點が多くあつた。

十月五日 研究會、「ドイツ神秘主義思想について」發表者、大正大講師峯島旭雄氏。

十月十六日 淨土の會、出席者、佐藤賢順、佐藤密雄、佐藤良智、竹中、宮林、水谷の各氏、トラクトの件、新年度編集プラン等種々協議された。

十二月六日 淨土の會、佐藤良智先生宅に於て、佐藤賢順、佐藤密雄、中村、竹中、宮林、水谷の各氏が出席して、本年度の回顧と新年度の事業計畫、および本會が七百五十年遠忌を中心に展開する運動等について意見の交換がなされた。

昭和三十一年度總目次

一月號

新年を迎へての希望

佛教入門(その四)

法然上人傳

法然上人と現代

小矢 兒

御忌や御忌

「法然上人全集」苦心談

童話 木魚ボクボク

梅の咲くころ

二月號

卷頭言

山 椿

念佛と生活

童話 ありがたいお守

隠れたる妙好人

新興宗教讀本(5)

涅槃會に思ふ

ホノルル通信—第一信—

巴御前と覺明(上)

佛教入門(その五)

神居琳應 1

佐藤密雄 27

惠谷隆戒 5

佐藤賢順 9

内山憲尙 14

戸松學瑛 18

大橋俊雄 21

森 正義 25

吉田絃二郎 2

三月號

卷頭言

彼岸のころ

所岸所感

彼岸の世界、彼岸の行事

童話 あみだ寺のだんごまつり

極樂へ行つた話

ホノルル通信—第二信—

映畫 ビルマの堅琴

巴御前と覺明(中)

新興宗教讀本(六)

四月號

卷頭言

山寺の春

降 誕

童話 花まつり

座談會 春と宗教

吉田絃二郎 1

大宮智榮 4

藤井實應 6

伊藤舉位 12

戸松啓眞 25

松濤弘道 17

水谷哲雄 23

鶴田湛泉 24

竹中信常 27

新興宗教讀本(七)
新刊紹介

五月號

卷頭言

吉田絃二郎先生を悼む

曇鸞大師

善導大師

鎮西上人

記主上人の生涯

近頃保育隨想

日曜學校の歩み

ホノルル通信—その三—

巴御前と覺明(下)

新興宗教讀本(八)

六月號

卷頭言

念佛の意義

五重のお話—念佛の生活—

地方の五重相傳會

童話を家庭へ

靈場今昔

生ける念佛行者宮川翁

ホノルル通信—第四信—

竹中信常 28

27

佐藤賢順 1

藤堂恭俊 2

宮林昭彦 6

眞野龍海 11

大野法道 14

内山憲尙 18

山口謙次 20

松濤弘道 22

鶴田湛泉 24

竹中信常 27

阿川實達 2

宮林大廉 7

福富海岳 15

内山憲尙 19

根本曾代子 20

辻 昌瑞 21

松濤弘道 24

安居香山 18

佐藤密雄 22

漫々の快々の
佛教入門(六)

佐藤密雄 29

司會竹中信常
安居香山 18
佐藤密雄 22

尾陽の生んだ名僧の数々
祖法然上人の歌(二)

大橋俊雄 26
澤田岳潤 29

七月號

卷頭言

遺影(晩年の絃二郎先生)

句集

遺稿 讀書日記

妙好人

吉田絃二郎先生を想う

吉田先生と法然上人續仰會

先生と編輯部

吉田絃二郎著作年表

ホノルル通信—第五信—

祖法然上人の歌(二)

佛教入門(その七)

昭和女子大近代
文學研究室調
松濤弘道 20
澤田岳潤 22
佐藤密雄 27

八月號

卷頭言

法然上人に對する日蓮聖人の態度

須藤隆仙 2

ゆうれいの出るわけ

竹中信常 5

大文字

藤木隨教 9

ルボ夏期僧堂

11

たあちやんとヤギ
自坊自讃—長崎悟眞寺—
想戀譜

祖法然上人の歌(三)

佛教入門(その八)

九月號

淨土宗の勤行式について

讀經の意義

香 侶

三寶禮

奉請文

略懺悔文

三尊禮

開經偈

歎佛偈

法語一枚起請文

念佛と回向

四弘誓願

三身禮

送佛偈

十月號

卷頭言

北村謙順 12
木津義彰 17
鶴田湛泉 18
澤田岳潤 26
佐藤密雄 29

お十夜の話
十夜法要の解説
養老事業と念佛信仰
回顧 保護司三十年
兒童福祉にささげるまでの

私の幼少年時代の環境

ホノルル通信—第六信—

信心要決—一念佛行者の記録—安井香山 22

眞葛ヶ原問答

十一月・二月號

卷頭言

共生のつとめを通し阿彌陀佛を觀る

佛教美術より見たる阿彌陀佛

電話 鬼の念佛

金光上人感得靈像をお守りして

眞葛ヶ原問答—第二部—

佛教入門(その九)

續仰會メモ

三十一年度目次總目錄

その他「書評」「新會員紹介」

大野法道 2

吉水大信 4

川瀬法圓 7

林田智源 13

小川金英 16

松濤弘道 20

萩行建堂 28

吉原自覺 2

小島章見 6

内山憲尙 12

工藤昌瑞 16

萩行健堂 20

佐藤密雄 24

29

30

「浄土」の健全なる発展のために

皆様の深い御支援を御願ひ申上ます

本會は、日本浄土教の開祖法然上人の偉大なる芳躅を慕いつゝ鑽仰運動を展開してより廿有餘年、爾來今日に至る間、時代の苦悶に喘ぐ社會の眞只中にあつて、正しき上人の思想信仰を弘化し、以て淨佛國土成就衆生の悲願を達せんがために、月刊宗教雜誌「浄土」をはじめ幾多の出版物を刊行し、其の眞使命を全うして居ります。しかも、私共は昭和三十六年に迎える法然上人御遠忌七百五十年を眼前に控え、思想の混迷と民心の動亂する現代にこそ眞佛法の開顯が要求され、愈々法然上人の慈悲のみ教えが渴仰されるとき、本會の責務の轉た重大なることを痛感するのであります。

然しながら、本會も創艸以來自立獨歩して他の援助を蒙むることなく、會員皆様の御協力に依つてのみ維持して参りましたが、戦後の時代的不況の中にあつて多事多難に遭遇し、未だに幾多の苦境に當面致して居ります。只逸早く本來の姿に還るよう懸命の努力を拂いつゝも尙御期待に添い得ず、御迷惑をお懸けして居りますが、何より現代の本會の推動力となつて居るのは、本會創立以來關係者一同の物心兩面に亘る絶大な御援助と惜しみなき御奉仕によるのであります。

茲において、本會の一層の發展と所期の目的を達成せんがために、會員及び有縁の皆様方の深い御理解と御同情により基金を募集致し、更に力強く歩むことに致しました。

何卒、趣旨御理解の上、一口千圓、應分の口數において御助成を賜りますよう切に御願ひ申上ます。

東京都品川区上大崎一ノ七八二

法 然 上 人 鑽 仰 會

新會員紹介(其二) 順不同

愛知	靜岡	滋賀	大坂	奈良	兵庫	熊本	福岡	長崎	東京	北海	神奈	川	道														
崇源	藤田	報土	西井	堀井	了法	常盤	堀木	潮田	岡崎	平田	渡邊	實相	報身	正瑞	上村	服部	須賀	爪生	高瀬	長瀬	近藤	西原	前田	宮崎	塚原	稻葉	西迎
寺様	乘様	寺様	海様	隆様	寺様	雄様	恩様	郎様	順様	道様	應様	寺様	寺様	寺様	肇様	稚様	子様	引様	文様	寺様	康様	弘様	郎様	美様	實様	寺様	寺様

編集後記

○今年は、南傳による佛滅二千五百年に當る。ネパールの首都カトマンズでは、ブッダ・ジャヤンテイ(佛紀二千五百年祭)の一環の行事として、世界佛教徒會議が盛んに行われた。参加國は三十ヶ國、三百余名の代表者が異なる風俗、民族の感情を超えて佛陀のみ名のもとに一堂に參集し、當面せる幾多の現實問題と對決して世界平和實現のために寄與せんとする動きは力強きことである。

○それに呼應して、佛教の國際性という事が問題になる。わけても日本佛教独自の性格をもつ淨土教に關する世界性という事である。このことは、前月號の卷頭に佐藤賢順先生が論ぜられていたが、その教義、思想は敢くまで原典に忠實に顯彰さるべきことは勿論であるが、表現方法は最も新しい表現技術を用い現代的感覺の中において把握されねばならない。その意

味からしても、先生の主張は再讀三考に價する。

○最近、講演に、執筆に忙しい賢順先生が、NHKの人生讀本で五回に亘り觀經講話の放送をされた新視覺のもとに、氏獨特のもち味で説き明かされ、大變興味深いものであつた。

○本誌も一年回顧してみると、多くの紆余曲折はあつた。數少い編集スタッフの中、梅津君を失い、残れるもの、力戰苦斗したが幾多の障害に逢着し、會員皆様には大變御迷をおかけしたが、只ひたすら會員の深い理解に支えられてその使命を全うしてきた。今はしづかな反省の中に、來るべき年にすべて期待を寄せるのみである。

○本年度の編集方針は、特集號形式に始終したが、仲々の好評裡にこの巻を終ることが出來た。新年度も會員皆様の助聲を大切にしていきたいと思う。

○では、皆様よき新年を。(宮林)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「淨土」 十一・二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三十一年十一月廿五日印刷
昭和三十一年十二月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信常
發行人 佐藤 密雄
印刷人 春山治部左衛門
印刷所 共立社印刷所
東京都品川區上大崎一ノ七八二
發行所 法然上人續仰會
振替東京八二一八七番

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

御袈裟法衣御調進

- 錦金襴
- 御水引
- 御幡
- 特種織物
- 御打敷
- 稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新装の稚兒貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺

宗務所

大正大學

芝中高校

淑徳學園

御用達

東京都港區西久保巴町一〇六

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にの
ツトで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
管・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

銀ブランコ2人乗	¥ 13,000
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報力タロク送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付